

特集

遥かなる



藤内32号住居址

は石包丁いしぼうとうを使って穂首を刈るとい
う作業を行っていたようです。
中でも現在の「つるつくび」や
「立ちがんな」と呼ばれる除草具
によく似た靴形鎌の種類の多さは、
当時の雑草取りの大変さを覗かせ
ます。
また、農工具の他に、石うす
磨り石がたくさん出土しています。
これらは、栽培した粟や黍などの
穀物の殻取りと粉ひきに用いられ
ました。石うすに穀物を広げ、磨
り石で軽く磨ると殻が取れ、それ
を粥のように炊いたり、更に粉に
ひいて餅や団子にして食べたので
しょう。
ところで、たおやかな石うすの
形は女性そのもの、あるいは子宮
を象なまこっていると言われています。
そこから挽き出される穀物の実は
子孫繁栄への願いであるとともに、
食物を生み出す女神として崇めら
れました。使い古された石うすは、
新たな豊穡を祈り、ばらばらにし
て畑などに撒かれたものと思われ
ます。
この他にも、樹木を伐採するた
めの石斧や矢尻などが多数出土し
ています。鎌などの道具は、石刃
を「フ」の字形の枝の又に縛りつ
けたり、フジなどの蔓で巻き挟ん
で固定する独特な方法が採られて
います。また、石斧は柄に孔をあ
けてはめ込みました。



農作業の様子

行われ、住居址8軒を調査した。
以後36年には5軒の住居址が確
認され、平成元年までに、多数
の住居址・小竪穴（墓穴）と特
殊遺構（中央墓群）、広場など
が発掘された。
これまでの調査で、藤内遺跡
は中央に広場が位置し、小竪穴
が広場を囲み、さらにその外側
を住居が同心円状にとり巻く、
直径およそ90メートルの環状集
落であったことがわかってい
る。
藤内遺跡からは、神像筒形土
器、蛇を戴く土偶など遺跡を解
明する多くの貴重な資料が出土
しており、現在土器47点・土偶
1点・石器151点が国の重要文化
財に指定されている。